

## 世界をより深く理解するために、 その背景にある思想の歴史の糸を辿る 知的探求者

マシューズ先生の研究室の入口に飾られた一枚のモノクロの版画が目にとまる。

ルネサンス期のドイツの画家アルフレッド・デューラーの「メランコリア I (Melencolia I)」である。そのミステリアスさとパワフルさに惹かれて、と先生は笑顔で答えるが、その答えの背景にある膨大な知性は、文学や歴史、哲学や思想史にはとどまらない。

「Melencolia」にあたる英語「Melancholy」の意味が時代とともに変化してきたように、社会や文化、そして思想には歴史がある。過去と現代、未来を結ぶ変遷の糸。先生は世界における真実や本質を追求すべく、その糸を様々な視点から辿る。

## 様々な文献やメディアから、 多角的に情報を得る

小さな頃から読書好きだったというマシューズ先生。休日は神保町での古書巡りが楽しみ、と言う。先生は文学を読むこと、勉強することの楽しさを「審美的 (aesthetic) な楽しさ」と表現する。それは「情報を得る」とか「学術的な研究のため」とかではなく、純粋にそれ自体を「楽しい」とか「面白い」と感じるのだと言う。それにしても読書量が膨大である。小説や詩の他、古い伝記やノンフィクション、エッセイなど様々な

文献を読む。読書好き、学者だから、というよりも、それは先生の研究スタイルであり、Odell Shepard (以下、シエパード) というアメリカの作家の影響だと言う。

「1930年に出版された彼の『The Lore of the Unicorn』という、ユニコーンの概念の歴史についての検証本があります。ユニコーンは想像上の動物ではあるけれど、その概念がいかに社会的、宗教的、政治的、経済的な影響を、ヨーロッパとアジアの社会に何千年にも渡って与えてきたか、その本で彼は示したのです。例えばルネサンス期には『ユニコー

ンの角 (実際は羊、サイ、一角クジラの角なのだが) の取引』なるものが、欧州全体で大々的に行われていました。その取引は、当時より数千年前のギリシヤや中東で発展してきた『ユニコーンは病気を治す』という考え方に基づいているのです。シエパードがユニコーンの概念の発展の歴史を、文学だけでなく哲学書、医学書、経済統計など様々な形の書物から学んだことが、私にとつての手本になっています」

先生はこのスタイルを学生の授業にも採用しており、歴史書、新聞や雑誌の記事、時にはポップソングの

詞も使用する。英語本の多読が難しい日本の学生には、映画やテレビ、音楽などといった異なるメディアも使うことで、研究への意欲を損わないようにしているそうだ。

様々な情報を多角的に得るならば、様々な膨大な情報量を有する現代のインターネットも有用ではないか。「人々がどのように世界を理解しようとしているか」という論点は私の研究の中核を成すものですが、インターネット上の情報のすべてを人々が見たり、理解するわけではありません。さらに問題なのは、人々が検索機能に頼り過ぎていて、自分の知

識の断片を繋げて思想として描きだす能力を失いつつあることです。インターネットは流し読みするには適してはいますが、やはり私は本でじっくり読むことが大切だと思います」

入り混じる巨大な情報の海原においては、より情報を繋げる力が必要となる。マシューズ先生の「知」とは点ではなく、それらが有機的な糸のように繋がった時に初めて形を成すものようだ。

## 英語圏文化における異文化の影響

マシューズ先生の専門は「英語圏の文学および文献」とあるが、「文学作品の研究」というよりシェパードのように様々な文献を辿ることで、思想の変化と社会に対する影響を時軸や地理的繋がりの中で理解しようという研究である。

先のユニコーンの概念にも見られるように、英語圏文化には異文化の影響が多く見られる。その例のひとつとして、先生が授業でも扱っている「現代のアメリカのポップソングの歌詞には、千年も前の北アフリカの哲人の思想が投影されている」という興味深い話を挙げてくれた。「アフリカ？」思わず聞き間違いかと思ったが、どうやら間違いではないらしく、これは北アフリカのタガス

テ（現在のアルジェリアとチュニジアの国境近く）を生地とする聖アウグスティヌスのことのようなのだ。彼はキリスト教思想における重要人物だが、ギリシャ哲学に影響を受けている。先生によると、現在見られる「愛」の概念の多くには、この聖アウグスティヌスの思想を受け継ぐ、中世ヨーロッパの「Chivalry（騎士道）」と呼ばれる思想の影響が見られるという。「それは少し変わった考えで、騎士は真実の愛をひとりの女性に誓わなくてはいけなくて、女性は身分が高くてほしいがお姫様。騎士は戦争に行きモンスターと戦うのです。自己犠牲的に身を捧げ、とてもロマン

### MATHEWS, Cy Elza(ましゅーず さい えるぞ)

ニュージーランド生まれ。  
オタゴ大学人文学部英語・言語学科

卒業、同大学大学院人文学部英語・言語学科修了、Doctor of Philosophy in English、Master of Arts with Distinction in English 取得（いずれもオタゴ大学）。オタゴ大学人文学部英語・言語学科研究助手、講師を経て、来日。2014年より中央大学総合政策学部契約講師に就任。2018年より同大学同学部助教、現在に至る。



先生の研究室の壁には、デューラーの「メランコリアI」の他に、先生が興味を持つ英文学作家や詩人の名前と生没年、作品の主題が描かれたメモが上から年代順に並べられている。

ティックなので多くの良質な物語を生みました」

このパターンの歌詞や映画は非常に多いため、教える際の教材に事欠かない。

『タイタニック』なんかは好例です。ジャックは非常に身分が低い男で、ローズは上流階級の女性。そして愛には困難がともなう。彼らがあがき苦しむのが良い、とされます。でももちろんジャックは最後に自分の身を犠牲にしますよね。とても古典的な話ですが、その思想の元は古代ギリシャにあるのです」

実際の男女間で男性がデート代などを出すというのも、この騎士道の影響だとのこと。

「しかし、そのような考えは現代では変化してきています。例えば50年くらい前なら、男性はデート代を出さなくても、女性のために扉も開けてくれるでしょう。でも今はそんな事したら、時には性差別主義者だと思われるかもしれない」と先生は笑顔で言うが、これは冗談ではなく実際に起こり得る話である。

## 異文化への関心とステレオタイプ

先生は、思想が時には人の行動を変え、世界の歴史を動かしてきたことに着目する。例えば、17世紀のRichard Hakluyt（以下、ハクルート）という著述家は旅の話に惹かれ、自分では旅をせずとも、旅に関する様々な文献を集めた。その膨大なコレクションを編纂した『The Principal Navigations' Voyages' Traffiques and Discoveries of the English Nation』という彼の本は、異文化への興味が非常に高かった当時のイギリスにおいて絶大な人気を得た。

「それを読むと世界の様々な面が見できると同時に、当時のイギリスの人々がどのように世界について考えていたかわかります」

そこにはイギリス人の異文化に対する強い関心とともに、ステレオタイプ、つまり先入観や偏見といったものも散見されるといえる。

「例えば、ある文化圏は未開だとか、そこに住む異種の人間に対する恐怖

などです。それらは非常に影響力が大きく、時には人の行動をも変えてしまう。本で発見した考えが実際の世界の発展に作用するのです」

そのステレオタイプは女王にも影響を与え、アメリカ大陸への植民政策の後押しをしたという。その歴史的意義を考えると、一冊の本、ひとりの思想の影響力というものは、想像以上に大きい。

そして現代も同様、ステレオタイプが実際の国の移民政策などに影響している。ゆえに先生は「題材としても、情報としても、とても興味深いテーマ」と言う。

「ステレオタイプみたいなものは案外、我々の物事に対する知識の大きな部分を占めています。でも人々はそのステレオタイプには気づかない。ですから、私は一般的な事、世界について、時には愛について、そして異国間の相違についての思想とといったものを教えるのです」

実は先の騎士道の話で、筆者の私は「欧米の男性はレディファーストで、今でもドアを開けてくれるものだ」と思い込んでいたため、先生の話聞いて初めてそれがステレオタイプだと気づき、異文化に関して古い情報のままにいることもステレオタイプになり得るのだ、と少し驚いた。私もステレオタイプにとらわれない視野を身につけるために、先生の授業を受けた方がよさそうだ。

## ステレオタイプを 払拭する「歴史の目」

先生も以前は、本を読んでステレオタイプを抱いたこともあったと言う。



この日の国際的視点を習得するクラスでは、国際的な武器見本市の写真を見ながら各自の印象を話し、議論が行われていた。

「人間というものは、未知なものに恐怖や不可解さを抱いたりするものです。でも、理解が進めば恐怖も薄らぐ。未知なものを怖がるだけじゃなく、もっと現実的に対処した方が良いと思います」

未知のものとは、往々にして外来者である。

「例えばアメリカでは、何世代にも渡ってアメリカに在住してきたにも関わらず、地元のそれよりイタリア系マフィアは怖い、と思われていきます。それはなぜなのかをクラスで議論します」

議論は様々な視点や情報を得て自分の意見を形成する有用な手段であるが、最近先生は教材として写真など広告ビジュアルや報道写真、絵画、イラスト、グラフィックデザインなどの視覚的イメージも多く取り入れ始めたという。

「視覚的イメージは社会と文化について多くの事を教えてくれます。これらは異文化間でも簡単に理解できるものと思われがちですが、そうではありません。視覚的イメージは非

常に強力で物事を必要以上に単純化してしまい、人はその認識がないまま単純な着想をそこから得てしまいがちです。ステレオタイプの元は、しばしばこの視覚的なイメージであることが多いのです」

特に最近ではインスタグラムの流行などに見られるように、視覚文化の影響が増しているため、人々がステレオタイプを持つ危険性も大きい。先生はそうならないためにも「読む」ことが不可欠だと言う。

「その背景にある詳細な情報を得て、単純化しないようにバランスを取ることが必要です。両方重要なのです」

先生はそのような、ある事象をその背景にある繋がりの中で認識する視点を「歴史の目」と称する。

「学生たちには、自分たちの周りの世界を『歴史の目』を持って見てほしいと思っています。それはただ単に今日の前にあるものを見る、というだけではなく、それが過去からどのように繋がっているかを認識するということです。例えば映画『タイタニック』の背景にキリスト教を経

由した古いギリシャの思想を見る、というように」

二千年以上の時を経て発展してきた今の価値観や社会システムなどを含む現代思想を、この「歴史の目」で見ることにより、現代社会をより深く理解できるようになると先生は言う。

そして思想は変化し、変遷の糸は過去から現在に、そしてその先の未来に繋がる。

「騎士道の思想ではロマンスは常に男女間のことで

すが、今は同性愛だってある。思想の歴史を理解し、思想が社会と文化に与えた影響を分析することができれば、未来の予測にも繋がります」

先生は確信を持って、今は間違いなく将来が重要だ、と語る。私たちひとりひとりの思想もその思想の歴史の糸の重要な一端であり、未来を創り出すものだとするれば、先生の教える「歴史の目」を持つことは極めて重要なことだと思われる。



「哲学は抽象的過ぎて現実世界に繋がるようには思えなかった。文学を勉強することが歴史を通して社会と文化についての物事を教えてくれる」  
専攻を変えた理由にも、先生の真実を探求する姿がうかがわれる。

### 高校生のみなさんへ

大学は幅広く深い勉学の機会を与えてくれますが、それを活かすのは皆さん次第です。一生懸命自分自身の力で研究することを学んでください。私も皆さんが潜在的な能力を発揮できるようお手伝いします。